

スピノザにおける「本質」と「永遠性」

吉田 健太郎

社会科教育講座（哲学）

Spinoza on Essence and Eternity

Kentaro YOSHIDA

Department of Social Studies (Philosophy), Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

はじめに

本論文は、スピノザが『エチカ』第5部の後半で問題にしている「精神の永遠性」について、「本質」が「永遠性」とどのように関係するのかを明らかにすることを通して、スピノザのいう「精神の永遠性」について整合的な解釈を提示することを目的としている。本論文は大きく二つの部分から構成される。前半は、スピノザにおいて事物の「本質」とは何であったかを確認する。後半は、前半の議論を踏まえて「精神の本質」とその「永遠性」との関係について考察する。まず、本論文の議論を主導する区別、すなわち「属性のうちにある事物」と「時間的持続のうちにある事物」の区別を明示するキーセンテンスを引用しておこう（第5部定理29備考）。

事物はわれわれによって二通りの仕方で現実 *actualis* として考えられる。事物を一定の時間および場所に関して存在するとして考えるか、それとも、神のうちに含まれ神の本性の必然性から帰結する *sequor* として考えるか、そのどちらかである。後者の仕方で真あるいは実在 *realis* として考えられるすべての事物を、われわれは永遠の相のもとに考えているのであり、そのような事物の観念のうちには、第2部定理45で示したように（その備考を見よ）、神の永遠かつ無限なる本質が含まれているのである。（E5P29S）

1. 事物の本質について

1-1 本質についての一般的考察

事物の「本質」とは、事物の「何であるか」を規定するものである。それゆえ「定義」に等しい。また、真なる定義は自己の本性そのものしか含まない。ところで、真なる定義は、実在に関わるものでなくてはならない。本質が実在性と等値される所以である。単なる思考上の産物や虚構とは区別されなくてはならない（E1P8S2）。

「本質」は、具体的事例によって表現される形で示される。たとえて言うなら、目には見えない本質は、現に存在する目に見える具体例によって表現される形でのみ、示されるようなものである。ただし、具体例そのものが本質と混同されてはならない。具体的に挙げておくと、神の絶対無限なる本質は属性の存在によって、属性の本質は無限様態の存在によって、無限様態の本質はあらゆる有限様態の存在によって、有限様態の本質は様態的変状の存在によって、おのおの表現されている。絶対無限なる神の場合のみ、表現されるものが表現するものと一致する。

「定義」には、一定数の個体についての規定が含まれない。それゆえ、同一本性を表現する複数の個体が存在する。たとえば人間の本質は、現に存在している個々の人物の存在によって表現されていることになる。また、「本質」は、いわゆる普遍の本質、類的/種の本質に限定されるわけではない。かといって個別的本質のみが本来の意味での本質だ、というわけでもない。「人間の本質」も「ソクラテスの本質」も、独自の「存在の度合い(実在性)」として別個に規定されている。

本質は様態の存在のように、「産出produco」されるものではない。事物の本質は「神の本質を通して考えられなければならない」(E5P22)とスピノザは言う。それゆえ事物の本質は、神の本質から、属性の本質である「存在の本性」を介して、その「存在の度合い(実在性)」として「帰結」するものである。

ところで、本質を潜在的/可能態として事物のうちにある何かと解してはならない。可能態にある何かが、現実化されて存在のうちに引き出されてきたというイメージで、本質が理解されてはならない。スピノザには、本質と事物との関係は、あくまで「表現関係」において理解されるべきである。それゆえ、本質が事物から「因果的」に産出されることはない。

また、本質はあくまで「神の本質を通して」考えられるのであるから、たとえば有限様態の本質が無限様態の本質から帰結する、ということもありえない。したがって、神の本質から無限様態の本質が帰結し、その無限様態の本質から有限様態の本質が帰結するというような、いわば「本質の連関」なるものを想定することはできない。すべての様態的事物の本質は、「存在の本性」がもつ「度合い(実在性)」であるから、「属性の本質」からいわば直接帰結するのである。たとえば「ソクラテスの本質」は「人間の本質」から帰結するのではない。「ソクラテスの本質」も、「存在の本性そのもの」がもつある「度合い」としてのみ規定される。したがって、アリストテレス流の類/種/個体の関係によって本質が規定されるわけではない。

スピノザにおいて本質とは「力」のことである、といった解釈上の通念があるように思われる。しかし、力の帰属先は、本質と存在が一致する神の場合は別にして、様態についていうなら、「本質」の側ではなく「存在」の側にある。たとえば個物としての精神は、「観念」そのものであり、単なる「絵imago」(E2P48S)ではなく思考活動/思考作用そのものであった。つまり、精神としての観念は、現に活動している思考の力であった。一方、様態の本質は、現に活動している事物の力によって表現される、「属性の本性」(存在の本性)の「度合い」である。その限りでは、「力」ではなく「力の度合い」(能力)と規定することもできる。

1-2 本質の認識と存在論的身分について

様態の本質とは、様態における「実在性」のことである。もちろん、「実在性」は具体的な様態的事物そのものではない。「実在性」は具体的事例（様態の存在）によって、表現されるものである。この「実在性」としての様態の本質が、「属性の本性そのもの」の「度合い」であると解することができる。

ところで、現実に存在する個物に依拠することなく、個物の「定義」（本質）としての「実在性」なるものが、考えることができるようになってきているのはなぜだろうか。「実在性」とは「事物」ではないのだから、「存在しない」はずである。「存在しない」はずの実在性について、考えることができるとはどういうことか。スピノザの回答は次のとおりである。「実在性」が「属性の本性」のうちに含まれており、それを通じて「実在性」について、現に実在している個別的事例とは関係なく、考えることができるようになってきている（E1P8S2）。

そうだとすれば、様態の本質は、あくまで様態の存在とともに（様態の存在との関係で）「与えられるもの」（定義）にすぎない。「存在するもの」ではないので、「実在性」を何らかの具体的事例（様態の存在）と同一視することはできない。「実在性」を様態に内在する「力」と同一視することもできない。実在性は力そのものではなく、力の「度合い」なのだから。とはいえ、「実在性」を何か様態的存在とは別種な存在として、物象化することも避けなければならない。あくまで、属性の本性を通して「与えられている datur」（思考可能となっている）「定義」にすぎない。

「実在性」は、現実に存在する「個物」によって表現/展開されている。では、この「個物」として表現される、「実在性」そのものは「どこに」存在しているのか。実在性は存在するものとは思えないので、「個物のうちにある」とは言えないはずである。「実在性」の存在が宙に浮いてしまうのではないか。

ここから、宙に浮いてしまうことを避けるために、一方では「実在性」を様態そのものの存在とは別タイプの「本質存在」として措定したくなるという誘惑がある。他方では、「実在性」を様態の存在そのもののうちに位置付けるために、実在性なる概念を「自然化」して、様態的事物の存在のうちに実在性を還元する方向で考えたい誘惑もある。

おそらくスピノザは、どちらの方向もとることはないだろう。繰り返しになるが、「実在性」は、あくまで属性の本性を通して考えることができるようになってきている、というのがスピノザの回答である。それでも、「実在性」の存在についてこだわるならば、次のように回答するであろう。属性の本性は「神の本質」から帰結するので、様態的事物の「実在性」が「属性の本性」を介して「神の本質」に含まれていると見られる限り、様態的事物の「実在性」は、「属性の存在」において表現される何かとして確固とした存在論的身分をもつのだ、と。

様態的事物の諸性質から類推抽象することによって、本質が知られるわけではない。「表現される」本質が、「表現している」事物からのアプローチによって知られるようになるわけではない。だからといって、本質に関して全く不可知であるわけでない。スピノザによれば、本質は存在とともに現に「与えられている」。「与えられている」という言い回し

は、本質が人為的に作り出されたものではないことを示す。本質について考えることができるようになってきているのは、様態について知るのとは別の仕方であることができるようになってきているからであった。人間精神には、自己の「存在の度合い」（実在性）のパーセンテージまでは知られないかもしれない。しかし、現に「ある一定の度合い」として属性の本質のうちに含まれていなければならないことは、考えることができる。論証を通じてそのような考えざるを得ないようになってきていることじたいが、人間精神に「与えられている」ことを示している。ここに、「認識」と「存在」のギャップはない。十全なる「認識」は、そのまま十全な「事実」に対応している。これがスピノザの並行論であった。

事物の本質認識は対象認識ではなかった。ここから、人間精神は人間身体についての十全な理解をもつことはできないが、人間身体の本質については十全な理解をもつことができる、ということが帰結する。人間身体は存在や生成に関して外部の物体から規定される。したがって、人間身体について十全な理解をもつためには、すべての自然の秩序を理解しなければならない。有限な人間精神には無理である。ところが「本質」の認識に関しては事情が変わってくる。上述のように、事物の本質は事物の諸性質の認識とは別に「与えられている」のであった。しかも、神から必然的に帰結するものとして与えられるのであった。そうだとすれば、有限な精神は、無限なる神については十全に理解することができるが、有限的事物については十全に理解できない、という一見逆説的なことが帰結することになる。

おそらく、スピノザが採用する立場は、中世における伝統的な存在論とそれほど変わらないものではないだろうか。われわれが諸事物の存在において、ある「実在性」なるものが表現されていると考えてしまうとすればそれは、神の絶対無限なる本質を構成している属性の本性（存在の本性そのもの）と、われわれが何らかの仕方ですでに関わりあっているからだ、という考え方である。すべての個物は、神の本性を、個物自身が存在することにおいて表現している、と言われる所以である。この点はある意味、非常にプラトニックであるともいえる。「存在そのもの」の本性を、何らかの仕方ですべて「分有」しているからこそ、あらゆる事物が「存在の相のもとに」（実在性において）把握されるのだ、というわけである。そのスピノザ的バージョンが、個物は「神すなわち自然のうちにある」というものであろう。

事物における本質は、「属性の本質」すなわち「存在の本性」のうちに基礎をもつものである。そのことを理解しない場合には、本質そのものが宙に浮いた、「空洞」や「穴」のようなもの（上野1999）として、抽象的な何かよく分からないものとして表象されてしまうという危険性がある。おそらく、本質概念に付きまとう形式的かつ抽象的なイメージは、属性との関係から分離されてしまって、様態レベルで自足するものとして考えられてしまうことに起因するのであろう。そして、この本質を抽象的に考えてしまう傾向性は、その反動として容易にかつ安易に、本質を量化してしまう危険性とも隣り合わせなのであろう。「存在の本性」そのものが属性の本質から分離され抽象的に解されてしまうと、一種の外延量としての「持続するもの」と解されてしまうことになる。

1-3 『エチカ』第2部定理8「存在しない個物」の解釈

「個物/様態の形相的本質 *essentia formalis* は、神の属性のうちに含まれる。それと同様に、存在しない個物/様態の観念は、神の無限なる観念のうちには内包されていなければならない。」(E2P8)

同じ定理8の系では、個物が「神の属性のうちに含まれて存在する」場合と、「時間的に持続して存在する」場合とを対比させる形で言及されている。この対比は、第5部定理29備考で再度言及されることになる。「事物が神の中に含まれ、神の本性から帰結すると考えられる」場合と、「事物を一定の時間および場所に関係して存在すると考える」場合の対比である。ところで、第5部定理29備考では、どちらの場合でも事物は「現実」に存在するものとして考えられると言われていた。この第5部定理29備考での用語法にもとづくなら、「現実存在していること」即「時間的に持続して存在すること」ではない、ということがまず確認される。神のなかに含まれてある個物も、やはり「現実的に存在する」のである。「存在すること」イコール「時間的に持続して存在する」というわけではない。したがって、個物とはあくまで「時間的に持続して存在する」ものだという先入観に縛られないならば、単に「個物の存在」とだけ言われる場合、それを時間的持続に限定することはできない。

ところで第2部定理8にもどってみると、つづく定理8系のところで言及される「属性のうち」と「時間的持続のうち」との対比を念頭に置くなら、「存在しない個物」の「存在しない」は、「時間的に持続する」形では「存在しない」という意味でしかないだろう。いかなる仕方であれ、そもそも「存在する」か「存在しない」かの二者択一の意味で選択されるべき「存在しない」、すなわち全くの無、ではないだろう。以上のように解釈することが妥当だとすれば、「存在しない個物/様態」とは、属性の本性的うちに含まれる個物/様態の「形相的本質」だということになる。少なくとも、「存在しない個物」を、現にいま存在してはいないが、過去に存在していたか、将来存在するであろう個物のこととして解することはできない。いかなる時間的様相で考えられようとも、その場合、個物は「持続の相」で把握されてしまうことになるが、第2部定理8でスピノザが問題としているのは、「属性のうちにある(含まれる)」限りでの個物のことであるから、「存在しない」とは「時間的に持続して存在しない」に限定されるだろう。

次のような反論が想定される。個物が存在しなければ、個物の本質も考えることはできないのではないかという反論。「存在しない個物」は、そもそも「存在しない」のだから、個物が「何であるか」を規定する本質、他から自らを区別する規定、が存在しえないのではないか(無のうちにはいかなる特性もない)という反論。

前者の反論に対して。この反論は、第2部定義2にもとづくものである。「それがなければある事物が、また逆に、そのある事物がなければそれが、あることも考えることもできないようなもの、それが事物の本質である」と言われる。この引用で使用されている指示代名詞「それ」は個物の本質のことを、「ある事物」は個物のことを、それぞれ指していると解すれば、この第2部定義2は、個物の本質は、その本質を表現する個物の存在との関係を離れては考えることはできないことを言っている。それゆえ、個物が存在しなければ、そもそもその本質も存在しないはずだ、全く存在しない個物に対応する「形相的本質」

も考えることすらできないはずだ、ということになる。全くその通りである。個物の本質は、その本質の表現事例である個物の存在との関係を離れて与えられることはない。そもそも、個物の存在によって表現されてあるのが本質なのだから。「表現としての個物」と「表現されるものとしての本質」とは、不可分の関係にある。

そうだとするなら、第2部定理8の「存在しない個物」解釈の反論根拠として、「個物の本質は個物の存在を必要とする」を挙げることは、そもそもの外れなものであろう。第2部定理8では（のちの第5部定理29備考でも）、個物が「属性のうちにあると見られる」場合、「時間的に持続して見られる」場合の、個物における二種の在り方が問題となっているのであった。それゆえ、「存在しない個物」とは、「時間的に持続して存在しない」が「神の属性のうち存在している」個物か、それとも「神の属性のうちには存在しない」が「時間的に持続して存在している」個物か、そのいずれかのことになる。もちろん前者の場合であろう。「存在しない個物」とは、属性に含まれる個物の「形相的本質」のことである。

後者の反論に対して。個物の様態的区別（規定）と、個物の本質の区別（規定）とを混同してはならない。そもそも、事物の本質は、その表現としての「様態的事物」と同一視することはできない。事物の本質は、様態的事物を構成する客観的性質によって規定されるものではなかったからである。なぜなら、本質はあくまで（存在の度合いとしての）「実在性」であった。そして、その実在性は、神の属性の「存在の本性」そのものを通じて考えられる何かであった。それゆえ、属性のうちにある「存在の本性」そのものは、様態的事物の客観的性質のように、時間的に持続する外延量として、「抽象的」に考えられるものではないからである。

事物の「形相的本質」は、あくまで「存在の度合い」すなわち「実在性」にもとづく規定（定義）でなければならない。それは、「存在の本性」のいわば「度合い」「濃度」として、属性の本性の中に含まれる何かである。属性のうちには、そもそも区別がないのではないか、という反論も成り立たないだろう。そのような反論は、「属性の本性」と「属性の存在」を混同しているといえる。無限様態の存在によって表現される「属性の本性」と、神の絶対無限なる本質を表現している「属性の存在」とは、注意深く区別されなければならないだろう。たしかに属性は、存在としては自身のうちに事物としての区別をもたないだろう。しかし、「属性の本質」（存在の本性）としては、自身のうちに「度合い」としての区別をもつとスピノザは見ているようである。その「度合い」としての「実在性」が、各々のレベルの様態的存在によって表現されることになるわけである。

これまでのことをまとめておこう。

事物の「本質」とは、「存在の度合い」すなわち「実在性」である。スピノザは明確に、本質は「神の本質を通じて考えられなければならない」と言っていた。これは、「神の本質」から必然的に帰結する「属性の本質」すなわち「存在の本性」そのものを介して、事物の本質が知られなければならないことを言っている。事物の本質は、「存在の本性」そのものに関する規定（定義）でなければならない。スピノザにおいては、事物はあくまで「存在（すること）」によって十全に説明されるのである。

ところで、「神の絶対無限なる本質」は、属性によって表現されている。たとえば、「延長すること」や「思惟すること」が「神の本質」そのものの表現として、「存在」の実質を構成する。それゆえ、有限的個物は諸属性の様態として、「ある一定の度合い」で延長したり思惟することによって、「神の本質」そのものを表現していることになる。ところで、「物体の本質」は、「物体的変状modificatio」によって表現されている。ここで物体的変状は、あくまで物体の本質の表現事例にすぎないので、物体の本質を物体的変状の諸性質によって説明したとしても、それは「真なる定義」ではなく、あくまで「名目的定義」にすぎない。物体の本質は、ただ「延長することの度合い（実在性）」としてのみ規定される。具体的に、どのような形状や状態で運動し、どのような結果をいつどこで産出するのか、そのような内容規定は本質のうちには属さない。

「存在の本性」をいかなる「度合い」で担っているか、それが事物の「本質」である。伝統的にも、事物における「本質」と「存在」は区別されるという通念が強く残存しているために、事物の「何であるか」（本質）を、事物の「存在すること」の度合い（実在性）によって定義づけることには抵抗があるかもしれない。しかし、スピノザ哲学においては、事物の本質は、神の本質から必然的に帰結する「存在の本性」の「度合い」にすぎないのであり、そのことが「すべては神のうちにある」ということなのであった。

「属性の本質」すなわち「存在の本性」そのものは、神の絶対無限なる本質から帰結する。そうだとすれば、「個物の本質」は「属性の本質」を介して、「神の本質」そのものに含まれていると言える。ところで「神の本質」は、「属性」の永遠無限なる存在において表現されている。それゆえ個物の本質は、属性の永遠無限なる存在において、永遠なるものとして表現されていることになる。したがって「個物が属性のうちに含まれる」とは、属性の本質を介して神の本質そのものうちに含まれる個物の本質が、属性の必然的存在において永遠なるものとして表現されている、ということになるであろう。

2. 精神の永遠性について

『エチカ』第5部定理22, 定理23の引用

神は個々の身体の存在の原因であるばかりでなく、本質の原因でもある（第1部定理25より）。したがって、その本質は必然的に神の本質そのものを通して考えられなければならない（第1部公理4より）。しかも、ある永遠なる必然性によって考えられなければならない（第1部定理16より）。それゆえその概念は必然的に神のうちに与えられていなければならない（第2部定理3より）。(E5P22)

神のうちには人間身体の本質を表現する概念ないし観念が必然的に与えられている（前定理により）。この概念ないし観念は、それゆえ必然的に、人間精神の本質に属するあるものである（第2部定理13より）。ところがわれわれは、人間精神が身体の現実的存在（持続によって説明され、時間によって規定されるもの）を表現する限りにおいてのみ、時間によって規定される持続を精神に付与する。すなわち（第2部定理8系により）身体が持続する間のみ、精神に持続を付与する。しかしそれにもかかわらず、いま言われたあ

るものは、神の本質を通して、ある永遠なる必然性によって考えられるものなのであるから(前定理により)、精神の本質に属するこのあるものは、必然的に永遠的であろう。(E5P23)

思惟属性から産出される無限様態としての無限知性のうちに含まれる特定の理解(知性/観念)として、「神の観念」(神/属性についての理解)がある。この「神の観念」のうちに含まれる(そこから帰結する)形で与えられるのが、個物の本質についての理解(観念)である。たとえば、「人間身体の本質の観念」は、神の観念のうちに含まれる。このことを別の言い方で表すなら次のようになる。思惟属性の本性のうちに、「存在の度合い」(実在性)として含まれる「形相的本質」を、様態として表現したものが、神の観念のうちに含まれる「人間身体の本質を(永遠の相のもとに)表現した観念」である、と。

ここで注意が必要なのは、無限知性を構成する「人間身体についての理解(観念)」と、同じく無限知性を構成する「神の観念」から帰結する「人間身体についての本質についての理解(観念)」とは、別個の理解(観念)として厳密に区別されなければならないということである。人間知性とは、実のところ神の観念に含まれる人間身体の「本質についての理解」のことだといえるので、人間知性は「人間身体についての理解(十全な観念)」に関しては、それをもつことはできないということになる(E2P19)。

2-1 スピノザによる永遠性の定義

「永遠性とは、存在が永遠なるものの定義のみから必然的に帰結すると考えられる限り、存在そのもののことと解する。」(E1Def8)

見られる通り、スピノザ的には永遠性とは、「存在の永遠性」そのものに関わる。神の本質(定義)からは、「存在の本性」そのものである「属性の本質」が必然的に帰結し、たほう「神の本性」そのものは、諸属性の「存在そのもの」によって表現されているのであった。要するに、スピノザのいう「永遠性」とは、神の本質が「諸属性の存在」によって表現されるかぎりでの、「属性の存在」そのものの存在様相といえよいだろう。したがって、「必然性」それじたいが「永遠性」であるわけではない。AからBが論理必然的に帰結するからといって、その「論理必然性」が即、「永遠性」だというわけではない。「存在そのもの」つまり「属性」に属する何かが必然的に帰結する場合に限って、永遠性が言われるということになる。それゆえにまた、いわゆる「永遠真理」については、それが「存在そのもの」すなわち属性に関わらない場合には、本来の意味での「永遠性」とは区別されることになるのかもしれない。

無限様態について、それが「永遠に実在する」(E1P21)と言われるとき、その「永遠性」の根拠は「無限様態の存在」そのものに帰属するのではなく、「属性の本性」そのものに帰属すると言える。「無限様態の存在」は、「属性の本質」を表現しているという点で、「無限様態の本質」を表現している「有限様態の存在」から区別されるのであり、この点においてのみ、その存在の永遠性が言われる。ここでも、永遠性は「属性との関係」においてのみ語られる様相であることが示されていると言えるだろう。

「永遠性」については、それは「無時間」的ないわば瞬間なるものなのか、それとも、むしろ「永続性」「全時間性」と解すべきものなのか、スピノザ解釈のなかでも議論さ

れてきた (Parchment2000)。もっともスピノザ自身は、永遠性を「持続や時間によっては説明されないもの」と言っている (E1Def8e)。いずれにしても、「属性の存在」に帰属する特性としてのみ、永遠性が語られていることは確かである。「属性のうちにある」とことと「時間的持続のうちにある」とことが峻別され、事物を「属性のうちにあるものとして」見る場合には、事物の本質が、「属性の本質」そのものに帰属する「存在の度合い」として、必然的に神の本質から帰結する何かとして見られる。その場合、事物の本質じたいが、神の永遠なる「属性の存在」そのものによって表現されることになり、よって永遠に存在すると見られることになるだろう。そのことをスピノザは「永遠性」と呼んでいるのだと理解しておきたい。少なくともその限り、「時間性」とは関わっていないと思われるからである。「永続性」は、属性における「存在の本質」そのものが、無限様態の存在として表現されてあることを、様態の側から示すものでしかないだろう。

2-2 「身体との関係を離れた精神」とはどういうことか

「身体に対する関係を離れた精神の持続に関する問題に移る時である」 (E5P20)

「身体が存在に対する関係を離れて考察される限りにおける精神」 (E5P40S)

精神とは「身体の観念」にほかならない。だとするならば、精神に関して身体との関係を離れることは不可能ではないのか。神の無限知性のうちに与えられるのは「身体の本質を表現する観念」であった。しかし、「身体の本質」を表現している限りにおいて、身体との関係を全く離れているとは言えないのではないのか。確かにその通りである。有限様態である精神は、観念という形式で存在するのであり、しかも身体を対象としている。精神を様態レベルで考える場合は、「身体の観念」として身体との関係を離れるわけにはいかない。となると、スピノザが「身体との関係を離れる」というときには、これまでの議論から察するに、精神を属性のうちにあるものとして見るということを行っているとはか解しようがない。

ところで、観念を思惟属性のうちに含まれたものとして見るとは、「無限なる思考活動そのもの」によって表現されている、「存在の本質」そのものの「存在の度合い」として、観念を様態的存在の次元ではなく属性の「存在の本質」そのものの次元で見ることだと考えられる。その次元において観念は、もはや「精神」とは言われないうちにも、それでも「何か」として、思惟属性の本質のうちに含まれるだろう。その「何か」は、もはや「身体の本質の観念」のように、「観念」という存在論的身分にあるものではないはずだ。観念とは対象をもつかぎりにおいて観念なのである。そうだとすると、身体との関係を離れるとは、対象との関わりという観念の様態的次元から離れて、思惟属性そのものの本質のうちに、自らの本質を位置付け直すことだと言えよう。その次元では、有限な個物としての精神自身が思考しているのではなく、神自身が、自らの「ある度合い」において思考しているということになるのだろう。

2-3 「人間精神の本質に属するあるもの aliquid」とは何か

本質は様態的事物の存在によって表現されているわけだが、表現じたいとしての様態的事物とは区別されるものであるから、対象的には知られないということになる。対象的に

は知られない本質は、そのものとしては属性の本質に含まれるものとして、属性の本質と同格の存在論的身分をもつものであると思われる。属性は自らに属する特性を「対象的」に知るわけではないであろう。また属性の本性に含まれる事物の「形相的本質」は、属性の本性のうちに含まれてある限り、神の絶対無限な本質から帰結するものとして、永遠無限なる存在（属性の存在）によって表現されることになる。その限りにおいて、永遠に存在するものと見なされる。

ところが、本質とは「単なる定義」にすぎず、事物の存在から抽象された思考上の「形式」にすぎない、という先入観がわれわれにはあるため、属性のうちに含まれた「本質」の「存在」が問われたときに、定義としての本質が、「存在そのもの」としての「属性の存在」とどのように結びつくのか、理解に苦しむことになる。それゆえ、属性に含まれる本質は、独特の存在の仕方をもつ何かだ、と考えたくなるのも無理はない。その場合、本質を「純粋な力」と規定して、アリストテレス流の形相/質料の区別を借用し、具体的な形をもち対象的に知られる「質料的存在」からは区別される、無限定で対象的には把握されない「純粋な力」としての「形相的存在」なるものが想定されることになるだろう。本質が単なる「可能的存在」ではないこと、しかし「延長」や「思惟」として表現される「存在そのもの」に還元することもできないように思われること、そうしたことから、本質をいわば「本質的存在」として措定してしまいたくなるかもしれない。

おそらくこうした方向性は、スピノザ自身の主張から離れてしまうことになるだろう。スピノザは、極論すれば個物そのものが力だと解していたと思われる。「個物」と「個物の本質」とが区別される場合には、「力そのもの」として存在する「個物」と、そのような力としての個物によって表現される「実在性」（存在の度合い）とが区別されていたのであった。スピノザ解釈においては、本質の側に力を見る傾向が強いように思われる。しかし、様態的事物において「存在する」のは、個々の「観念」であり個々の「物体」である。それらは「存在する」ものである限り、もちろん現に活動する「力そのもの」である。力そのものに可能態/現実態の区別を適用しないとすれば、活動する力は、現に「存在するもの」以外のものではない。しかるに本質は、「存在するもの」によって表現され示される何かであった。実のところ、本質が存在するという言い方はあくまで、本質が具体的事例によって表現されるということ以上のことを言うのではない。

属性の本質そのものである「存在の本性」は、「様態の存在」によって、実体的存在から位相を変化する形で、様態的に表現されている。したがって、少なくとも様態的次元においては、「存在するもの」としての力は、「表現する側」（様態の存在）のうちに反映されていなければならない。しかるに、本質は、「表現される側」にある何かであった。

具体的な対象を介して表現されるしかない本質に対して、それが様態的存在のように対象的に知られるのではない、という対象認識の不可能性を言い表すために、論者たちは「空洞」や「内容の希薄さ」（鈴木2006）といった表現を与えていた。第5部定理23に見られる「人間精神の本質に属するあるもの」の「あるもの」というあいまいな言い回しが使用されている理由を、本質の対象認識不可能性に由来するものとして解釈している。解釈としては間違っていないだろう。ただし、問われているのは本質認識一般についてではなく、属性のうちに含まれる「形相的本質」についての認識であったことを、あくまで念頭

に置いておかねばならない。属性の本質のうちに、ただ「存在の度合い」としてのみ含まれている何か、「属性の存在」によって神の本質が表現されるさいの、その神のうちに含まれる何かとしての個物の存在様式が問われているのであった。

ところで、有限なる人間精神にとっては、個物の「存在の度合い」がどの程度のものなのか、それを他の「度合い」から区別して意識的に知られているわけではない。少なくとも、人間精神の知りうることは、属性の本性のうちの一定の「存在の度合い」を表現するものとして、個物が「属性のうち」で必然的に存在しているということだろう。そして、精神の「永遠性」が理解されるには、それで十分である。

以上の考察から、精神の本質に属する「あるもの」と言われる理由について説明を与えることができるだろう。一つには、様態レベルを離れて属性の本性のうちに含まれているものとして（「存在の度合い」として）事物を見るとき、観念のように対象性をもつものとしては、もはや捉えられなくなっているということ、に関わる「あるもの」であろう。もう一つには、属性の本性のうちに含まれる「実在性」として事物を見る場合でも、それがどれくらいのパーセンテージで表示される「実在性」なのか、他の「実在性」との区別に即して意識的に知られないこと、に関わる「あるもの」であろう。

2-4 精神の永遠なる部分

「より多くの事物を第二種および第三種の認識において認識するにつれて、それだけ大きな部分が残存する」(E5P38)、「精神の永遠的な部分は知性intellectusである」(E5P40C)

ここで言われる精神の部分とは、属性のうちに含まれている部分ではなく、有限様態として精神が現に存在するとき、精神を構成する諸観念のうちのある部分という意味である。精神は、十全な観念と非十全な観念とから複合されて構成されている。精神は、有限様態として存在する限り、「自然の共通な秩序ordo」(E2P29C)のうちで、外的諸事物から影響を受けてしか存在しえない。それゆえ、自己の存在を外部から規定するものについては、非十全的にしか認識しえない。われわれの精神は、不可避的にその大部分が非十全的な観念から構成されている。とはいえスピノザによれば、われわれは非十全な観念からでも、それらに共通する「共通概念notio communis」を形成することによって、十全な観念を獲得することはできる。さらに、運がよければ、自らの身体を神の属性のうちに含まれるものとして、「永遠の相のもとに」見ることができるようになるかもしれない。さらにまた、身体の本質の十全な認識の形成をきっかけにして、事物を「永遠の相のもとに」見る習慣を身につけることが可能になるかもしれない。もっとも、そのような仕方では形成された観念も、有限精神を構成する一つの観念にすぎない。それゆえ、いかなる観念であれ、それが様態的に存在するものである限り、観念の対象である身体と存在の帰趨をともしする運命にある。

より多く、事物を十全に「永遠の相のもとに」見ることができるようになるにしたがって、精神を構成する諸観念群のなかで占める部分として相対的に、「知性」に属する部分が増大すると言われる。その増大に呼応して、自己が神のうちに含まれることを自覚できるようになる機会が増える。ただし注意すべき点は、「知性の部分」それじたいが、個物としての精神が存続しえなくなったのちも、あたかも亡霊のごとく、「身体の本質の観念」

として存在し続けるというわけではないことである。

スピノザ的には、事物の「永遠性」は、「存在の本性」そのものである「属性の本質」を介して、最終的には自己の本質が「属性の存在」によって表現されることへと繋がっていくものであった。自らの本質が、属性の「存在そのもの」によって表現され、永遠に存在することを自覚することが、「永遠性」の感得であった。したがって、「精神の永遠なる部分」(知性的部分)と「精神の本質に属する永遠性」とは厳密に区別されなければならないだろう。われわれは、十全な観念を形成することによって、相対的に「永遠なる部分」を増大させることができる。しかし、そのことじたいが精神の永遠性を証明するのではない。「永遠なる部分」を増大させることによって、属性の本性に含まれる自らの本質が、属性の存在によって必然的に表現されるようになること、それゆえ時間的持続とは関係なく永遠に存在すること、そうしたことを自覚する機会を十全な観念の形成が与えるのである。

2-5 精神が永遠であることを感じること

「われわれは自身が永遠であることを感じsentioかつ経験する」「持続によって説明されえないことを我々は感じる」(E5P23S)

精神が「属性の本質」(存在の本性)のうちに「存在の度合い」として含まれていることを、論証を通じて理解すれば同時に、自らが永遠であること、すなわち必然的実在の一部分であることを感じるとスピノザは言う。しかし、なぜ「感じる」なのか。永遠であることを「理解するintelligo」だけでなく、それを「感じる」とはどういうことか。

人間精神が産出された様態であること、しかも他の有限様態から産出された有限様態であること、このことと神の属性のうちにあることとは存在論的にギャップがある。それゆえ、事物を属性のうちに含まれたものとして見ることにしても、そのような精神の「存在論的移行」が自然に可能となっているわけではないだろう。そのためには魂の修練を要するであろう。スピノザの『エチカ』はそのための実践であったに違いない。

思惟属性は思考活動という仕方での「存在そのもの」である。ところで、「理解する」「表象する」「想像する」「意志する」「感じる」「欲する」などは、すべて「思惟属性」の「様態」であるにすぎない。無限様態である「無限知性」にしても、産出された様態である。そうだとすれば、思惟属性としての神は、知性理解(観念)によって思考していると、その思考活動を様態化して語ることはできないように思われる。まして、「無限知性」イコール「神」ではない。

では、思惟属性としての神の思考活動をどのように言い表すべきか。絶対無限なる神だから純粋な「理解活動」なのか。絶対無限なる力である限り「絶対自由意志」こそ神にふさわしいというべきだろうか。もちろんどちらでもないだろう。そもそも思惟属性に対して「いかなる仕方でも」思惟しているのかを問うことじたい、思惟を様態の次元に「格下げ」していることになる。したがって思惟属性の思考形式は、様態的形式である「観念」ではない。そうだとすれば、精神の本質が思惟属性のうちに含まれると言われる場合、その存在形式は「観念」としてではないだろう。

それゆえ、思惟属性に含まれる思考に対して「感じる」という表現を与えたとしても、「感じる」というだけでダメだというわけにもいかない。「理解する」「意志する」にしても、「感

じる」ことと同様、様態の規定であるからには、属性の在り方を形容する表現としては適切でないとも言えるからである。ある意味では、思考様態を言い表す従来の言語表現とは全く別の表現が必要になってくるのかもしれない。スピノザが第5部定理23備考で使用している「感じる」という言葉は、従来の意味での「感じる」とは別のニュアンスを込めて使用しているのであり、ふさわしい言葉が存在しないので、いわば代理表現なのだというのが本当のところなのかもしれない。とはいえ、「感じる」ときにわれわれがもつニュアンスを、時間的持続とは無縁であるはずの「永遠性」の把握においても、類比的に適用しているとも思われる。

鈴木泉は、それを感得作用における「現前性」だと指摘している（鈴木2006）。対象との関りの「直接性」とでもいうべきものであろうか。「属性の存在」の一部分を占めるものによって、「自己の本質が必然的に表現されている」ことを、自己自身が「直に」意識していることを、感覚的把握がもつ「現前性」になぞらえて言い表したものと解することができるだろう。おそらく、「感じる」というかわりに、第三種の認識を特徴づける「直観する」でもよかったのかもしれない。伝統的にも「直観intuitio」は、推論によるのではなく「直につかむ」というニュアンスをもつ語であった。とりわけ中世においては神の認識に限定された語でもあった。いずれにしても、スピノザが使用している「感じる」という表記は、「直観知」のもつ「直接性」というニュアンスと、「感覚」のもつ「現前性」というニュアンスを併せもつものとして理解することができるのではないか。

おわりに

「属性の本質」のうちに留まったまま、様態としては産出されない、というようなものはそもそもありえない。「属性のうちにある」ことを、「可能性」として捉えることはできないからである。そもそも神のうちに「可能性」「可能態」はない。したがって、神の活動を考えるとき、「まだ様態を産出していない段階」（創造以前の神）を想定してしまうなら、それはスピノザ的には虚構にすぎない。それゆえ、個物の永遠性は、産出されずに属性のうちにとどまっている純粹無垢なイメージで捉えられてはならない。個物を「永遠の相のもとに」見るとは、現にいま存在している個物が、自身の本質が実のところ、神の「属性の本質」のうちに、ある一定の「実在性」として必然的に含まれていることを、まずは理解することである。そして次に、自身の本質が、神の「属性の存在」によって表現されていることを理解することである。永遠性が個物と関わるとすれば、それは「個物の本質」が永遠なる存在すなわち「属性の存在」によって表現されるかぎりである。

事物を「永遠の相のもと」に見るためには、「この生」における、いわば「魂の向きかえ」が求められる。しかしそもそも、個物が現にいま存在していないことには、個物を「永遠の相のもとに」見ることもできない。それゆえ個物の永遠性は、個物が存在しなくなったあとも、属性のうちに純粹な形相として存続しているような何かではなく、現にいま存在している個物において看取されるものなのである。

「個物を属性のうちに見る」といっても、属性のうちに様態的区別が内在しているわけでないので、「属性のうち」をいくら「のぞき込んでみて」も個物の本質が浮かび上がっ

てくるわけではない。あくまで論証を通じてのみ、個物を属性のうちに見ること、すなわち個物が永遠に存在すること、が見えてくる。論証している精神自身の活動が、それじたい自身が永遠に存在することを証明しているのであった。

<注記>

スピノザ『エチカ』からの引用表記は次の通り。E『エチカ』, P (定理), S (備考), C (系), Def (定義), e (定義の説明)。『エチカ』の邦訳は主として岩波文庫版の畠中尚志によるものを参照した。一部表記を改めているところもある。

<参考文献>

Deleuze,G: *Spinoza et le Problème de l'expression*, Minuit,Paris,1968

Donagan,A: “Spinoza’ s Proof of Immortality” in M.Greene (ed.) *Spinoza A Collection of Critical Essays*, Anchor Books,1973,pp.241-258

Parchment,S: “The Mind’ s Eternity in Spinoza’ s Ethics” in *Journal of the History of Philosophy*: 38-3, 2000,pp.349-382

Garrett,D: “Spinoza on the Essence of the Human Body and the Part of the Mind that is Eternal” in Oli Koistinen (ed.), *The Cambridge Companion to Spinoza’s Ethics*, Cambridge. U.P, 2009,pp.284-302

上野修 『精神の眼は論証そのもの』学樹書院, 1999

佐藤一郎 『個と無限』風行社, 2004

鈴木泉 「私たちは自らが永遠であることを感得し、経験する」東洋大学哲学科編, 『哲学を享受する』, 知泉書館, 2006, pp.181-206

柏葉武秀 「存在しないものの存在論－スピノザにおける精神の永遠性をめぐる一つの論点－」, 『スピノザーナ』(2009/2010), pp.35-53

(2020年9月23日受理)